

女性・少女漫画を素材とする異文化理解教育の方法 開発

因, 京子
九州大学留学生センター助教授

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院教授

松村, 瑞子
九州大学言語文化研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/16803>

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2002-03
バージョン：
権利関係：

第三部 発展研究用教材

日 下 翠

【作家／作品紹介】

今市子

○『ネムキ』の本が大人気。

今、『ネムキ(眠れぬ夜の奇妙な話)』関係の作品がおもしろい。波津彬子の『雨柳堂夢咄』、諸星大二郎の「栞と紙魚子」シリーズ、川原明子の『プランツドール』など、どれもお勧めだが、中でも抜群なのが今市子の『百鬼夜行抄(ひゃっきやこうしょう)』である。始めて読んだとき、あまり面白いので、なぜもっと早く読まなかったのか、ああ、損したと悔しがったぐらいであるが、最近こんな気持ちになった漫画というのも珍しい。というわけで、ここで少し、その魅力について紹介してみることにしよう。

○千魔万来の不思議でちょっぴり怖い日々

物語は主人公飯嶋律の祖父蝸牛の初七日から始まる。蝸牛は不思議な幻想小説を書く作家であったが、小説を書くために妖魔と取引をしていたとの噂があった。初七日に呼ばれた客は七人(「青嵐はどうした?呼ばれてないのか?」などと話をしながら酒を飲んでいく)。律は祖父の遺言にしたがって蔵の中に閉じこめられていたが、いつのまにか抜け出し、一人の奇妙な来客と出会う。やたらと腹を空かしたこの客は台所でつまみ食いをしていくが、律が名前を聞くと「お嬢ちゃんが名前を覚えてくれたら教えてあげる」と言う。律は「教えないよ…。じゃあこうしよう、おじさんが私の名を当てられたら言うことを何でも聞くから、そのかわり私が先に当てたらおじさんは私の言うことをきくんだよ」と言う。「よしよし、おもしろい事を言う子だね」と客は承知した。やがて先に席に着いた奇妙な七人の客の様子をうかがっていた彼は「腹が減って我慢できん」というと、いきなり蒼龍の姿をあらわし、部屋を出てきた客の一人(化け物の姿をあらわす)を、ぱくりと一口で食べてしまう。その姿を見て「青嵐」とその名を呼んだ律に、「なんだよく私の名前がわかったね」といった青嵐は、蝸牛が自分を見逃す代償に仲間の妖魔七匹を片付けることを約束したのだと事情をうちあける。「今夜のことは誰にも言ってはいけないよ」と言われた後律は意識を失う…。次の日、鍵のかかった蔵の中で眠り込んでいた律は家族の者に起される。「お客様は」と聞く律に母親は「誰も来やしませんよ。あれは形だけの仕度なんだから」と答える。律は小さいころ、魔を除けるためといって女の子の格好をさせられていたのである。

○大食いの青嵐

この後、この話は律と青嵐を中心に進んで行くが、この第一回とは設定が多少異なってくる。青嵐は式神によって殺された律の父の体に入り込み、家族として暮らすことになっ

ている。この大食いの青嵐のキャラクターもよくできていて、とにかくよく腹を減らしては、ぺろりぺろりと化け物を食べてゆく様子が気持ちよい。その特徴が一番よく出るのが「雪路」（『百鬼夜行抄』、第4巻所収 朝日ソノラマ）の章であろう。

この回では律は父を亡くした友人洋のために「代わりに食われてもいい」と言う約束を化け物ととりかわす。青嵐に「お前はおじいちゃんと契約したんだ。だから僕を守らなくちゃならないんだ」と言う律は「ここにいる限り僕は安全だ！」と言って震えながら布団にもぐりこむ。青嵐は妖魔の大群が家に押し寄せてくる気配を感じると、「私一人では手に余るな…」とつぶやく。この後律は、母の手に引かれ、遠い雪路へと逃避行を続けて行く。この物語の結末は読んでいただければよいだろう。

○巧みな伏線、奇妙な雰囲気

この回だけに限らない。物語はいくつもの伏線がはりめぐらしてあり、読み終わった後で、ああそうだったのかと納得する話が多い。であるから、読み出してからしばらくは奇妙な、理屈に合わぬ物語を読まされているような不思議感がある。それが最後にびたりとパズルの一片がはまり、すべてが合理性と整合性を持つときに、推理小説の最後の謎解きにも似た爽快感を味わうことが出来る。それからもう一度ああ、そうだったのかと納得しながら読みなおすのも楽しみの一つである。もっともそれは、この不思議な世界での合理性といってよいだろう。これは目に見えぬものが見える世界、もののけたちが隣りで住んでいる世界なのだ。絵が日本画風で実に美しい。静止した画面の冷たく澄んだ美しさはこの人ならではの魅力であろう。

今市子というペンネームは「いまいち」というしゃれかもしれない。しかし私は「今、いちおしの今市子」と友人に紹介している。

岩館真理子

○雰囲気を描ける貴重な作家

漫画家にもいろいろなタイプがある。ストーリー作りの巧みな人、せりふの上手い人、絵で見せる人など、様々であるが、岩館真理子は、雰囲気を描ける貴重な作家といえるだろう。特に、恋する少女のときめきや喜び、不安やせつなさを描かせれば抜群なのであるが（『まるでシャボン』と『おいしい関係』については、日下翠『漫画学のススメ』（白帝社）第Ⅱ章を参照されたい）、最近は大人の恋愛物語も描いている。

『うちのママが言うことには』（ヤングユーコミックス）は、コメディータッチでOL北風けいとと編集者甘夏英太郎との、恋愛から結婚までの長い道のりを描く。けいとのパックには父親と四人の兄がひかえており、気の弱い英太郎にとっては、結婚にこぎつける

までが一苦勞。仕事の面でも情緒不安定の拓子先生に振り回される日々で気の休まる暇が無い。ようやく結婚にこぎつけてからも、子供っばいけいととの新婚生活は苦難の連続。しだいに気持ちがすれ違い始めた二人に、けいとの友人金田一はるかへの英太郎の恋心とといった重大な危機がおとずれる…。といった波乱万丈の日常を描いた傑作である。

○奇妙なあじわいのファンタジー

こういった、恋愛と結婚をあつかった、いわば普通の物語以外にも、岩館真理子は奇妙な味わいのミステリータッチの作品も描いている。例えば『白いサテンのリボン』（集英社）、『アリスにお願い』（集英社）などであるが、ここでは、最近のファンタジーの傑作『キララのキ』（集英社）を紹介してみよう。

『キララのキ』（全4巻）は「ヤングユウ」誌に二年にわたり連載された。キララとは不思議な少女の名前であるが、作品の最初に「キラワレモノのキ、キジンヘンジンのキ、キカイカイのキ、キングコングのキ、キケンジンプツのキ」とあるように、様々な解釈が可能である。物語は、主人公十秋（とあき）の前に10才の時に木から落ちて死んだはずのキララが現れるところから始まる。このオープニングからして奇妙であるが、物語はその不思議な雰囲気をはきずったまま、フリーマーケットで知り合った亘（わたる）と心（こころ）の兄妹、十秋と継母キリコとの微妙な関係（十秋は継母の作った食事に毒が入っていると思いこみ、食べた後で吐いている）などを描いて行く。登場人物のお互いの関係がわかるのは物語がかなり進んだ後である。

○愛情のすれ違いによる悲劇

物語はキリコ（後、キョウコと改名）とナギコ、アキラの三姉妹とその母親、そして彼女たちの父親の弟子にあたる一人の青年（十秋の父）との悲劇的な関係に遡る。青年はその師の妻を愛していたが、彼女にそっくりな娘のナギコと結婚し、女の子が生まれたらキララと名づけようと言ったのである。ところが彼はナギコと離婚してキリコと結婚する。ナギコは離婚後精神科の医者と結婚し、心と亘の兄妹を生んだのである（二人は十秋のいとこにあたる）。そして、キリコの生んだ子こそが十秋であり、生まれた時はキララと呼ばれていたのであった。キリコは継母ではなく、十秋の実の母だったのである。最後は自分の子の記憶を取り戻したキリコが、十秋に向かって「お帰り」と呼びかけるところで終わる。十秋はようやく自分の帰る場所を見つけることができたのである。

○キララのキとは？

死んだキララは三女のアキラが生んだ子だった（父親は十秋の父？）が、10才の時に木から落ちて植物人間となり、それから6年後に亡くなったのであった。人形作りの巧みなアキラは機械で動くキララの人形を作ったのである。その機械のキララと幻のキララ、皆

の心の中のキララが入り混じるため、この作品はひどく分かりにくく、まるで悪夢の中を手探りで進むような不安を感じる。登場人物の誰もが愛を望みながら、望む相手の愛情を手に入れることが出来ない。この愛情のねじれによる人と人との心のすれ違い（その為精神を病んだキララは記憶が混乱して自分の子がわからなくなったのである）が生み出す悲劇を描く。無邪気なキララの意識は、未だに帰る場所が無くさまよっているのかもしれない。キララのキとは、愛による狂気のキであり、愛されぬ恐怖のキなのである。

楳図かずお

○少女はなぜか占いとホラーが大好き

女の子はなぜ恐怖漫画が好きなのだろう。コミック専門店には少女漫画のホラーコーナーができています。怖いお話というのはなぜか女の子の心を引き付けるのである。

その恐怖漫画の創始者であり、現在もトップを走り続ける第一人者、少女に恐怖のトラウマを植え付けた張本人、今なおこの人を抜く人はいない、どこかタメ張る人もいないという「恐怖の巨匠」—それが楳図かずおである。なにしろ、この人の作品はむちゃくちゃ怖かった。絵も怖かったが、話が常人には考えつかないほどの恐ろしさであった。ヘビ女、というだけでぎゃっと叫びだしそうになるほど今でも怖い（子供のころ一度夢に見てうなされたことがある）。その怖さの秘密を少しここで紹介してみよう。

○恐怖漫画の古典『ママがこわい』

楳図かずおの恐怖漫画の原点とも言える名作『ママがこわい』は、なんとお母さんがヘビ女と入れ替わるというもの。それがまた、気が付いているのが主人公の弓子だけ。弓子が「お母さんはヘビなのよ」と言っても誰も信じてくれない。お父さんに至っては「ばかっ！！」と怒って弓子を殴りつけ、「病気のお母さんになんてことをいうんだ。おかあさんは記憶を失って好みや性格が変わったのだ」と、しっかりした顔でまるっきり見当違いのことをいうしまつ。今なら「ばかはおまえだ、妻が別人になったことくらい気付いたらどうだ」と言うところだけど、なんせ昔の子供は思い切り素直だったもので、よその家のお父さんを批判することなんか意識の外。ただただ、弓子ちゃんかわいそう—と心を傷めるだけであった。その上お父さんは「どうやらはなればなれの生活が、心のくいちがいをこしらえたいらしい…」とかつてにきめつけ、「今夜から弓子をおかあさんといっしょに寝かせたら…」ととんでもないことを言い出すのである。ヘビ女と一緒に寝る…こ、こわすぎる—。そして、そのこわさが自分にしか分からない、という孤独感がなんともいえぬ

恐怖であった（これに比べたら、『ドラゴンヘッド』なんて、みんな一緒に怖がる分だけまだまし）。子供にとって（大人にとってもだが）、自分の真実と他人の真実が食い違うということほど怖い（アイデンティティが崩れる）ことはない。その上、恐怖の対象が自分の保護者であり、誰よりも愛するお母さん—と、怖さの要素をざっと数え上げてみただけでも、この作品は二重三重の恐怖の積み重ね。まさに恐怖の三回転半ジャンプ（何のこっちゃ）であった。『ママがこわい』はその次作『まだらの少女』、完結編の『ヘビ少女』（ここでヘビ女の正体が洋子という気の毒な少女の二十年後の姿であることが明かされる）の三部作よりなる。ぜひ一度、通して読んでみてください。

○恐怖のデパート 模図かずお

模図作品はこの他にも、『紅グモ』『黒いねこ面』『ミイラ先生』『赤んぼう少女』『蛇』『おろち』『洗礼』など多数あり、様々な異なる恐怖が描かれる。これらはいずれもハイレベルの作品で、読者の少女も怖い怖いといいながらも、ついつい買って読まずにはいられないという、中毒にさせるような魅力があった。

○ストレス解消と恐怖の追認

少女はなぜ「こわい本」が好きなのだろう（少年なら冒険とエッチにはしるのか?）。ここで思い出すのが「泣ける映画」という言い方（かつて宣伝文句に「三倍泣けます」と言う映画があったとか）。「泣ける」のと「こわい」のは「うり」になるのだ。なぜかって? そんなことは女（少女）なら誰でも知ってる。かわいそうな映画を見て涙を流し（コンセプトは他人の不幸）、こわい話に震え上がって非日常の世界をかいま見、一時日常生活の退屈さを忘れる—そう、ストレス解消。これが人気の秘密である。それと、現実との関連もあるかもしれない。少女の胸がふくらみ始め、大人びてくるにしたがって、近所のお兄さんも隣のおじさんも、なんだか不気味な正体をあらわしてくる。隣のおじさんが不気味だけど誰にもいえない、といった「おじさんがこわい」なら、現実そのもの。それにお父さんが見当違いのことを言う馬鹿であり、お母さんが時々別人のような怖い人になるというのは現実の恐怖の追認でもある。少女にとっては、日常がすでにホラーなのだ。

小花美穂

●子供もたいへん

小花美穂の代表作は何と言っても「こどものおもちゃ」（略して「こもちゃ」）であろう。アニメ化され、こちらも大ヒットしたことは記憶に新しい。

作品は絵がおそろしく可愛いく、おまけに頭の上でりすを飼ったりするような、変な母親が出てきたりするため、コメディに見えるが、実際の内容は相当シビアで暗い。

題の「こどものおもちゃ」とは、主人公倉田紗南（くらたさな）が出演するテレビ番組の名前であるが、同時に「子供にとっては大事だが、大人にとってはつまらないもの」という意味も持つだろう。こどもが成長するのに、おもちゃとの別れはつきものだが、そのつらさは子供にしかわからない。この題名に象徴されるように、この物語は紗南が、おそいかかるさまざまな試練を乗り越え、強い子供（！）に育って行く様子を描く。まったく今の世の中、子供もラクではないのだ。

●いきなり学級崩壊

まず、今はやりの学級崩壊（紗南は小6）が描かれる。中心人物の羽山（ハンサム）と対立する紗南。ちょっとやそっとのいじめぐらいでへこたれてたまるかっとならぬ姿がカッコいいが、バンジージャンプの度胸だめしでおもいきり悲鳴をあげてしまい、なかなか羽山をやっつけることができない。ところがひょんなことから羽山の家庭の事情を知る。羽山を生んだ時に彼の母親が死に、そのため父と姉が彼に冷たくあたっていたのである。かっとなった紗南は「親子丼バカ」と二人を怒鳴りつける。羽山も父親は息子の孤独に気づき、反省。親子の絆を取り戻す。それがきっかけで羽山は紗南に好意を持つようになった。この後はこの二人の気持ちの接近を描いてゆく。

紗南の方は、自分のマネージャー玲（二十才）に恋をしているが、当然失恋。「子供の初恋」とはいえ、紗南にとってこれはかなりハードな体験であった。ここからいよいよラブコメの世界が…と期待していると、紗南をとりまく状況は思いもかけぬ展開をみせる。紗南は捨て子であり、実紗子に拾われた身の上であったのだ。これは実の母の出現から、紗南の実紗子への愛情確認という結末をむかえ、なんとか無事に終わる。しかし、この実の母に捨てられたと言うトラウマは、最終回の最大の危機「人形病」（顔の表情が出なくなる病気）へと繋がってゆく。これはなかなかの大河ドラマなのだ。

●おなじみ大阪弁キャラ登場

中学生になった羽山と紗南の前に、大阪からの転校生松井風花（ふうか）が現われる。友人が出来て大喜びの紗南。ところが、ふとしたことから羽山は紗南に恋人が出来たと誤解。風花とつきあい始める。むろんこれは後で誤解が解け、風花はいさぎよく身を引き、

羽山と紗南の仲は復活するのであるが（それにしても、最近大阪弁のサブキャラはやたらと出てくるけど、たいてい振られ役。なんでやねん）。

●ついにこわれた紗南

その間にも嫌な教師に目の敵にされたり、羽山の同級生が一方的に羽山を恨んで腕を刺すなどのトラブルが次々と襲い、さすがの紗南もついに「こわれ」てしまう。顔に表情の出なくなる「人形病」になったのである。紗南は羽山と駆け落ち（大人のまねをしても大人になれるわけではないのに）する。しかし、無表情な紗南に耐え切れず、羽山は「ホントは…オレのほうがさみしーんだ」と泣き出す。紗南は羽山を抱きしめ「…ありがとう、ごめんね」とあやまる。そのまま泣きながら寝入った紗南は、起きた時には病気が治っていた。紗南は羽山の悲しみを思いやることで病気を克服できたのである。

●強い大人になるために

最後はラジオの悩み相談を始めた紗南が、羽山や風花たちと一緒に、身の上相談の相談者に会いにゆくところで終わる。紗南はもう子供ではない。他の人を支える強さを持った「大人」になったのだ。強い大人になるためには、まず強い子供にならねばならない。これはそんなシビアな現実を教えてくれる、深い内容を持った少女漫画なのである。

猫十字社

○理想の結婚生活

好きな漫画を10冊挙げろと言われたら、絶対入れるのが「小さなお茶会」である。おそらくこれは猫十字社の最高傑作であろう。この作品はぶりんともっぷの二人（二匹？）の日常生活を描く。二人が暮らすのは時間の止まった別世界。そこはお茶に入れるとしゅわわわ…と溶けてミルクティーの味になる猫星の実がなり、お日様がパンを買いに来て「とらのしましまバター」（もちろん『ちびくろサンボ』のあのバターである。しかし、残念なことにあの絵本は我々の前から消えてしまった）を塗って食べる世界である。二人はそこでいろんなお茶を楽しみ、時には「じゃむ猫ケーキ店」でケーキやビスケットを買う。もっぷの職業は詩猫（しじん）で、二人はいつも一緒。気が向けばサーカスを見、ピクニックや旅行に行つて過ごす—これは女の子の理想の結婚生活だろう。

○楽しいことがつまった宝石箱のような一日

例としてある一日を紹介しよう：雪の積もったクリスマス・イヴの朝、ぶりんは寝ているもっぷを起し、今日一日の予定をたてる：「これから朝ごはんをたべて、いちばんはじ

めに雪かきをやって、それからツリーを飾りつけて、次にケーキをやくの！」…「とくべつな一日の中に宝石箱みたいにいろんな楽しいことをつめこむのって大好きだわ」…

こうして雪かきを始めた二人だが、もっぷが雪の中から無くしたバッジやきれいな模様の古いコインを見つけるのにひきかえ、ぶりんは何も見つからない：「どうしてももっぷにばかりいいことがあって、わたしにはないのかしら」。だんだん元気が無くなったぶりんは、ケーキを焼くころにはため息をつき、「ひょっとしたら卵の中にいいこと入ってるかもしれないわね」という始末。そこでもっぷはうさぎりんごを作り、「さっきまで雪の中をびよんびよんしてた、いきのいいうさぎりんごだよ」とぶりんに渡す。にっこり笑って、たちまちぶりんは元気を取り戻す。そう、誰かが「君が大事なんだ、元気になってくれよ」といつてくれること一何より、これが一番すばらしいことなのだ。

○二人でいても淋しい時はある

ではこれは無邪気な、楽しい物語なのかというと、そうでもないのである。物語は夜や夢のシーンが多く、幻想的なイメージは時おり不吉な哀愁に満ちた雰囲気をかもしだす。わけもなく押し寄せる淋しさは、二人でいてもまぎらわすことはできない。当然だろう。人間は（猫も？）しょせん孤独であり、存在の悲しみから逃れることはできないのだ。そんな気持ちにかられたある朝、もっぷは寝ているぶりんの顔を見ながらこうつぶやく：「一匹（ひとり）になりたい、一匹になりたくない…そういう気持ちをお手玉のように放りつけて、ぼくは夜明けを迎えることがある。きみが嫌いだったりするんじゃ、もちろんない。だけどぼくはいま、どうしても一匹（ひとり）になりたいんだ」。もっぷは詩の会があるとうそをつき、一晩泊まりのあてのない旅に出る。知らない町の安ホテルにおちついたもっぷは、その晩ぶりんの顔を思い出し、泣きたいくらいに淋しくなる。そして次の日、もっぷはぶりんのためにばらのブローチを買い、我が家に帰ってゆく。自分以外の他人と暮らすために。この世で一番好きな他人と暮らすために。

人は一人暮らしが一番気楽で楽しいのかもしれない。では人は何のために結婚するのだろうか。都合がよくて便利だから？寂しさを紛らわすために？いや、おそらくは単に、この人と一緒にいたいという単純な理由からだろう。さらにいえば、一緒にいて時々お茶会が開ければ最高である。この作品のぶりんともっぷのように。

○止まった時が動き出すとき

長い間二人には子供ができなかった。これはそのほうが二人の世界を描くのに都合がいいからであろう。読者としては子供が出来てほしい気持ちと、いつまでも子供が出来なくてこのままの世界を続けてほしい気持ちと両方あった。しかしついにふたりの娘ぼぶりんが生まれる。ぶりんともっぷは、父と母になったのだ。この後、物語の中の時間が動き始める。こどもの成長が「時」をもたらしたのだ。そして動き出した「時」は物語を終焉に向

かわせる。この漫画は七巻で終結した。今でも大好きな、大切にしたい作品である。

魔夜峰央

○型破りの少女漫画

『パタリロ』のテーマソング「クックロビン音頭」の「パパンがパン、だーれが殺したクックロビン、あっそーれ…」を今なお覚えている人は多いに違いない（もっとも今でも踊れる人は少ないだろうが）。

魔夜峰央の代表作『パタリロ』は『花とゆめ』24号（昭和53年）に第一回が掲載されたが、これは相当型破りの少女漫画であった。主人公は常夏の国マリネラ国のプリンス、その名もパタリロ・ド・マリネール八世殿下。どんな美少年が出てくるかと思えば、これがなんと、つぶれ大福へちゃむくれの三頭身。病的なケチでゴキブリ並の生命力の持ち主、カサカサとゴキブリ走方で走り回るといふ人間離れした人物であった。作者の説明によると「年齢10歳、身長140cm、体重38kg（もう少しあるかと思った）、性格悪し」とある。ところがこのパタリロ殿下、意外なことにはおそろしく頭が良く、8歳でマリネラ大学に入学、一年で卒業、プラズマXというロボットまで作るという超天才。英国情報部の切れ者バンコラン少佐とともに、毎回起こる事件の謎を解決してゆく。一言で言う、謎解きサスペンスにドタバタナンセンスギャグをちりばめた内容をピアズリー風の耽美画で描いた作品（あぁ、一言では言えない！）というスグレモノであった。

○人気の秘密は美少年キラーバンコラン？

何しろ第一回目の、バンコラン少佐に紹介された時の会話が「英国情報部随一のすぐ腕バンコラン少佐、またの名を美少年殺し」「またの名…股に名前があるのか」「誰が股の話をしている」「まあまあ」と言った調子。それでも、パタリロは絵画の盗難事件に見せかけて自分を暗殺させようとした事件を見事解決。バンコランは「あいつはたくましいんじゃない凶太いんだ」とあきれながらも実力を認め、この先も延々六十数巻まで続けて（いまなお連載中）彼と付き合うはめになる。この超美形キャラバンコランの存在も人気の秘密であった。もてもてのバンコランには、物語の途中からマライヒ（もと殺し屋）という恋人ができる。二人は同棲（というより、もはや結婚）を始めるが、この、しょっちゅう浮気を繰り返すバンコランと、嫉妬深いヒステリー美少年マライヒとの毎回の夫婦喧嘩も見ものであった（どういふわけかこの二人には途中で子供ができる）。時々時代劇バージョンになり、波多利郎と万古庵が事件を解決する話になるが、そのときは妖怪ものネタが多く、こちらもひどく面白い。おなじみタマネギ部隊を始めとして、実は美中年の警察長官、ロリコンのヒューイット、渋いスパイの間者猫（かんじゃねこ。本物の猫らしい）

など多彩な登場人物も話をもりあげて、人気はたかまるばかり。ついには雑誌にファンコーナーまで登場したほどであった。

○ごぞんじ「パタはみ」

「私の母はパタはみを見て「ああ、パタリロが粹の中からはみ出しているからパタはみと言うのか…」とつぶやいていた」と書いた読者がいたが、これは勿論まちがひ。「パタはみ」とは「パタリロ！はみだしファン・クラブ」の略。ファンの投稿を掲載したもので本編よりも楽しみと言う人もいた。今も単行本の後ろに収録されているが、これを読むとこの作品の人気の秘密が分かる。思い切って言うが、じつは少女というのは、下ネタとホモネタが大好き、そのくせ羞恥心と性への嫌悪感は過剰に持ち合わせているという、まことにかっかいなシロモノなのである。耽美とギャグと美少年—これは欲求不満少女の大好物。この作品が人気を博したのも当然であった。

○魔夜峰央のマは摩訶不思議のマ

魔夜峰央は他に魔界ものの『アスタロト』、『妖怪始末人トラウマ！！』（ランドセルを背負った美少年虎馬猫太郎が、貧乏神と共に妖怪の始末を請け負う物語）、『妖怪盗賊マザリシャリフ』（主人公が長身の美青年と三頭身のギャグ型との間を行ったり来たりする）など、神魔妖怪ものにギャグとシリアスの入り混じった独特の作品を描いている。魔夜峰央は不思議な作家である。彼は少女漫画の一つのジャンルをたった一人で作り上げたのだ。

【漫画研究基礎資料紹介】

ここでは漫画の研究の為の基礎的な資料を紹介する。漫画については現在、数多くの本が出版されているが、中には重要なものとそれほど重要ではないものがある。それらに、A、B、C、Dのランクを付け、一応の目安とした。ここにとりあげたもの以外にも多くの本があり、これはほんの基礎的なものであることをおことわりしておく。

Aランカー必読書。あらかじめ読んでおくべき重要な本。

Bランカー一読の価値あり。

Cランカー面白いから、楽しみに読めば良いと思われる本。

Dランカー暇と金があれば読んでみればよい本。

1.『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ』（橋本治、1984年、河出文庫）

初の本格的な少女漫画の評論。少女漫画に真剣にとりくんだ、当時としては画期的な本であった。ただ、この著者の話法はいささか難解であり、著者自身「どうせ判ってもらえないんだらうからいいけどさ」という意味のことをしばしば言う通り、判りにくいの欠点である。ただの少女漫画ファンとしては何が言いたいのかよく判らないというところがあったが、根気よく読みとおせば味の有る本。A

2.『現代マンガの全体像』（呉智英、1987年、双葉文庫）

著者の漫画評論の代表的なもの。必読の書。A

3.『戦後マンガの表現空間』（大塚英志、1994年、法蔵館）

漫画評論集。但し、「第1部 記号的身体の呪縛—手塚治虫『まんが記号説』批判」などのように、作者の漫画の認識には、必ずしも賛成できない点が多い。「まんがは巨大な閉塞した表現空間である」という著省のあとがきは、この著者がいずれ漫画から離れて行く未采をすでに予言していたとあってよいであろう。C

4.『漫画原論』（四万田犬彦、1994年、筑摩書房）

漫画の基本文法を解析。根本的な、どう読むかを改めて最初から考え直そうとした本。著者が「完成された漫画のテキストをどのように解説してゆくかという一点に関わっている。漫画と呼ばれる記号の森の奥深くにまで入り込み、その大系を分析することが本書の目的である。」と言うごとく、基本的なコマの配分、オノマトペの問題、登場人物の顔、鼻の変遷などを語る。それはまた著者自ら言うごとく、「独創性に欠ける」ことであり、「誰が書いても同じ」ことで「漫画を読む人であれば当然知っているような事柄だけを、できるだけ正確に書き記しておこうと心掛けてきた」ということになってしまう。しかしそれは、今となってみればということであり、当時としては、日本人以外の人にとっては

「当たり前」ではないことをきちんと書き、基本から漫画を見直そうとした態度は先駆的であり、高く評価されるべきであろう。A

5.『私の居場所はどこにあるの?』（藤本由香里、1998年、学陽書房）

「少女マンガの変遷を、（恋愛）（性）（家族）（仕事）などのテーマ別に追っていくことでここ30年の女性の価値観の変化を探る」という目的に沿って書き進められたもの。それらすべては常に一つの問い、「私の居場所はどこにあるの?」の周りを回っていると著者は語る。これは漫画の評論というよりは、そのテーマを考えるために漫画を道具に使った本である。一つのテーマを取上げるごとに、このテーマ（トランスジェンダー、レズビアン、女性愛、社会、組織、生殖、生命、進化など）ならこう言う漫画があると、例がふんだんに挙げられるが、それらは専ら、著者が関心を持った話題ばかりで、著者の考え方に賛成できない人にとっては、違和感を感じつつ読み続けるのは苦痛かもしれない。本の後に付けられた作品リストは参考になる。B

6.『快樂電流』（藤本由香里、1999年、河出書房新社）

『私の居場所はどこにあるの?』に続く評論集。「女の、欲望の、かたち」と題の下にあるごとく、性に関する様々な考察が語られる。売春論、ポスト対幻想論、実験小説、レディース、ポルノの黄金律、AV論—自分を産みたい女たち、など。前作以上に自分のかかえる問題に悩む著者の個人的な悩みと問題意識への関心が強まり、漫画との関わりは薄くなる。「だが「愛」はなぜ、それほどまでに（権力）なのか」と繰り返し問われる。C

7.『さらば、わが青春の「少年ジャンプ」』（西村繁男、幻冬舎文庫）

『少年ジャンプ』創刊創成川からのメンバーであり、三代目編集長を務めた著者の、編集者時代の思い出を書いた本。他誌との争いや、ラブコメとの戦いが描かれる。かたくななまでに、少年漫画とは少年漫画らしくあるべき、という強固な価値観に貫かれた態度は反発も招いたかもしれないが、本宮ひろしを見出すなど、感の良さと運にも恵まれた著者がいてこそ、あのジャンプの繁栄があったのかも、と思われる。是非読んでみたい本の一つ。A

8.『漫画王国の崩壊』（西村繁男、1998年、ぶんか社）

同じくもと『少年ジャンプ』編集長による内部暴霧本。様々な社内での人間関係の軋轢や対立が描かれる。出版にあたっては、いやがらせや妨害があったという。漫画の編集という現場を知るには参考になる。B

9. 『まんが編集術』 (西村繁男、1999年、白夜書房)

『少年ジャンプ』編集長であった著者へのロンダインタビューをまとめたもの。「Iまんが雑誌とは何か、IIまんが編集とは何か、IIIまんがの原作とは何が、IVヒット作の舞台裏、Vライバル誌の存在、VIまんが産業の衰退と刷亡、の各章に分け、さまざまなエピソードが、現場の実態を伝えるなまなましい思い出話とともに語られる。巻末の『少年ジャンプ』全作品リストは貴重。A

10. 『ピンボー漫画大系』 (責任編集：竹熊健太郎&杉森昌武、1999年、祥伝社)

「カップラーメンと万年床…青春漫画の決定版！」とうたい文句にあるごとく、ピンボーに関する漫画を集めたアンソロジー。勿論表紙は松本零士の『男おいどん』である。ほかに『漫画家残酷物認』『義男の青春』『自虐の歓』『ぼくんち』『おもらいくん』『無能の人』等々、おおくのピンボー漫画が語られる。漫画がどのように「ピンボー」を描いてきたのかを検証。企画の発想が面白い。B

11. 『恋愛は少女マンガで教わった』 (横森理香、1996年、クレスト社)

かつて「少女マンガの黄金期」に少女時代を過ごし、マンガに恋愛・結婚観を教え込まれ、あとになって冷静に分析してみると、少女マンガに脳ミソを犯されていたことがわかる—と自己分析する著者による、「少女マンガにささげるオマージュ」。代表的な作品をとりあげ、様々な愛の形を分析してみせる。語りくちはイキがよく、本音でしゃべっており、読後感は爽快。是非一読をお勧めしたい本。A

12. 『少女マンガの愛のゆくえ』 (荷宮和子、1994年、KOEI)

「あの頃の少女」が書いた、セリフによる少女マンガ論。「『エースをねらえ』『ベルサイユのばら』『風と木の詩』……。こんなすごい経験をしたのは後にも先にもこれっきり。そしてこんな経験をした世代もこれっきり」と帯にかいてあるごとく、ものすごい時代に少女マンガを読んで過ごした著者の、各作品の名セリフによる作品論。たとえば、『エースをねらえ』なら、「女に価値があれば男はまつ。またせるだけの女になれ」(宗方コーチ)—現実には「女に価値があっても男はまたない」のだが。『ベルサイユのばら』だと、「これだけって…これはスープではないのか!？」(オスカル)「きょうは…ベルサイユは、たいへんな人ですこと!」(マリー・アントワネット)など、マニアなら忘れられない名場面の名セリフが語られる。時代の移り変わりを名セリフをてこにして語る切り口が面白い。A

13. 『アダルトチルドレンと少女漫画』（荷宮和子、1997年、廣済堂）

12.と同じ作者だが、このころ流行ったアダルトチルドレンと少女漫画とを結びつけてアダルトチルドレンを論じるために少女漫画を使ったもの。当然ながら漫画そのもののかかわりはうすれ、思想を語るために作品を取上げると言う逆転現象がおきている。「はじめに」で、「今の日本の社会に生きている女は、すべからく「アダルトチルドレン」と称されるべきなのだ。このことこそこの本を通じて私が語ろうとしているテーマである」と述べ、日本の女は精神的圧迫を受け、アダルトチルドレンとして不幸な人生を送っており、そのわずかな癒しが少女漫画と宝塚である—というところまではともかく読めた。だが、「おしゃれをしよう」の章で、「「男受けする服」ではない、ピンクハウスの服を着よう」との主張がされるに至って、もうこれはついて行けない、と感じた。著者は「このままではいけない、そう思いながらこの本を書いた。この本を読むことで、変えようとしても変えることの出来ない過去、自分自身に責任能力がなかった時代に対する後悔から、一人でも多くの女性が解放されて欲しいと願っている。」とあと。がきで語るが、賛成できない部分が多い。C

14. 『サルまん』（相原コージ・竹熊健太郎、小学館）

ごぞんじ名著中の名著。漫画学の古典。「第一章基礎テクニック、第二章ジャンル別傾向と対策、第三章まんが—その果てしなき未来、第四章デビューの秘訣、第五章新連載の秘訣、第六章付録」からなる。内容も、「パンチラ進化論」、「エロコメは回転寿司」、「レディコミはテトリス」「『芸術』は思春期の精神的ガン」など、思わず膝を打つ名言がずらり。A

15. 『夏目房之介の漫画学』（夏目房之介大和書房1985年）

帯に「マンガのまんがによる漫画のための本！」と書いてある。中の「文章版のための序」には「これはマンガによる、マンガのための、マンガについての本なのであった。本の中のマンガは、僕のオリジナルも、そうでないものもすべて僕が描いた。すなわち、他人のマンガはぜんぶ模写したのである。模写することは、なかば原作者になりきることであって、描いた人の気持ちまでわかる気がする。」というごとく、昔の漫画の作品についての思い出など、漫画の製作者である著者ならではの立場から、縦横に語った（描いた）漫画論。B

16. 『誕生！手塚治虫』（霜月たかなが編、朝日ソノラマ1998年）

日本漫画の繁栄は手塚治虫がいたからである。「しかしこの漫画の神様も、ゼロから突然出現したわけではない。そのことが、書きたかった。そしてこの巨木に見事な花を咲かせた戦前の大衆文化という土壌が、どれほど豊かな養分を蓄えていたか。そのことが、書

きたかった。」とあとがきにある。手塚治虫の、少年時代、及びそれ以前の時代背景、手塚の読んだ漫画本、戦前の漫画、アニメ、科学小説などが語られる。戦前にも豊かな児童文化の発達がみられたこと、戦争と児童文化への弾圧がなければ、もっと高い段階まで発展したであろうことが語られる。特に「マンガと乗り物～『新宝島』とそれ以前～」が面白い。今までに無かった空白部分を埋める研究。漫画学の為の必読書。A

17. 『マンガで育った60年』（辻真先、東京新聞出版局1999年）

漫画家になりたかったがなれなかった、というアニメ製作にたずさわった著者が語る、私的漫画史。作者別にさまざまな作品への批評が述べられ、興味深い。B

18. 『ぼくはマンガ家』（手塚治虫、大和書房）

手塚治虫の自伝。少年時代から虫プロ設立、アニメ製作からエピロークに至る軌跡を述べる。漫画研究書は必読の書。A

19. 『漫画の時悶』（いしかわじゅん、晶文社1995年）

漫画読みの達人と言われる著者の100作品を紹介した漫画案内。実名の盗作例つき。漫画の作者ならではの切り口が値打ち。「愚かだぞ柴門ふみ」など、論争ものも面白い。評論としても一流。A